

直木燕洋句碑建立記

大東港建設局總務科弘報股

はしがき

康徳10年2月11日の印象

1. 紀元節の式典が終了した瞬間、近藤局長から全職員に對し、沈痛な悲報が瀧らせました。直木倫太郎博士が真去遊ばされ

「……今は唯正式設喪をお待ちするばかりです」

と語る局長の面持ちは、悲痛であり場内は闇として唳つ起りませんでした。

局長の左肋に佩びた略章は、訥々と洩れる口唇と共に佞びしく玫瑰色に曇ひておりました。

2. 博士が旅舎に病み臥してから、私共は日夜交替で滿鐵安東醫院第1號室に詰め切りましたが、その朝が最後の御奉仕でした。私共1部の職員は、眞冬の晝下り局長の指揮に遵ひ、故博士の靈柩を擔ひ滿鐵醫院から臨時葬場たる大和橋通りの協和會館迄竊々と歩を進びました。冬晴れの沿道には淡雪が點在し歩調を合せる私共の足跡を深く刻みました。

靈柩のおもさ凍てつくあしの跡といつた印象がその日の想ひ出です。

3. 病篤き病室は深淵の如く静寂そのものでした。3月の窓外は霧氷に覆はれた枯枝が、冬空に凍てついて微動たにこしなかつたこととせう。かゝる時、博士は隣近の方々と最後の乾杯を交されたこととせう。その情景を御子息力殿が片言隻語と雖も聴き洩らさじと、克明に記録(本誌6月號登載)された走書を局長から手渡され静養校合したのもこの日でした。

大官直木參議は雲上人として近づき難いものでした。小冊子「大東港不凍状況觀察講演記録」に登載された遺影の直木技監は、生み親として私共の身近に感じました。然し病床中交替勤務した私共が語り合せた博士の爲人は、私共でさえ親愛の情を勃ひ起させる超人間味の體かと思ひ出た有徳の人としてクローズアップされました。今この任生言を拜讀しましたその刹那、期せずして透

徹した聖哲高僧の靈感を、全身に浴びた如く噴霧を洩らしたものです。

以上の印象を腦裏に刻んだ私共が再び博士の懸生とも謂ふべき句碑建立に一係員として奉仕し得られることは、身に餘る光榮と存ずる次第であります。

1. 句碑建立まで

月份牌は一枚一枚とめくられ、故博士に對する追憶も淡雪の消えるが如く薄らいで参りました。その間井野參議閣下を中心として、朝野の諸名士が相寄り相語り故博士紀念事業委員會が結成され、その實行計畫として故博士遺稿集の出版と句碑建立が決定されました。近藤局長も實行委員の1員として發起人に加はり、計畫の一つである句碑建立を擔當されることになりました。

句碑建立の地點は故博士と因縁淺からぬ湯池子近傍、碑石は地元所在の自然石とふのが計畫の趣旨でした。

1. 燕洋ヶ丘

外套の襟も立てたい3月中旬、雪融けの泥濘を冒して近藤局長は嚮導者たる横山技佐を帶同、親しく湯池子近傍を抜渉し、漸く温泉ホテル千峰閣の前面に在る無名丘を撰定、之を燕洋ヶ丘と命名致されました。

燕洋ヶ丘は千峰閣の前面に連亘する丘陵のうち、最も手近かな右手寄りに位し、南正面側の各窓からは1眸の下に臨まれる至極平凡な芝山で、麓の邊には處々僅かに灌木が息づかひしてあるといつた感じでした。

丘頂は50平米内外で、風雨に洗はれた岩石が2、3處在露出して居ります。

眞冬湯上り姿で、徒然な窓外の景を眺められる折は私共でも冬雲や一碑とめし丘の上とも申したい蕭條たる趣景です。

それ丈に技巧の伴はない氣易い感じのする丘とも申されませう。公園股の若い技士が苑路築造に日夜工人を奮勵したのも燕洋ヶ丘と命名されてからのことでありました。

千峰閣からは直線距離で約300米ですが、迂迴した苑路を辿れば徒歩で10分程かゝりませう。

2. 碑石探求

碑石建立の設計は、横山技佐が近藤局長の命を受けて、直接擔任されましたが、その探求の模様を同技佐の日記により觸いてみませう。

3月25日 地元の石といふ條件を充たすべく、今日も安東近在の記念碑を色々調査して見たが、殆んど全部が三股流産の花崗石を用ひて居た。

花崗石は句碑石としては白つぼく如何にも趣味がない。

何かよい石はないものか、地元の古老にも尋ね且つ石材業者を調査したけれども寛甸の奥山へでも入ればいざ知らず、運搬可能な地點には容易に見付かり相もない。

聊か思案投首の體である。

4月20日 第2回準備委員會の席上、少し距れてはいるが橋頭石を用ひたらどうだらうかとの發案があり、局長はその歸途「ひかり」の展望車から橋頭附近の山河をそれとなく眺めて居られたところ、南坂驛より少し橋頭寄の鐵橋附近の河床中に、見事な青石の轉石があるのを望見されたとか、歸局せらるゝや直ちに右橋頭石の調査を私に命ぜられた。

4月25日 工事指名業者たる淺野組々長淺野美作氏、同組土木係長大縣八郎氏と共に橋頭方面に向つた。先づ本地市公署工務科を訪問して、池邊工務科長に現地の事情を尋ねたところ、自動車の交通も覺束ない所らしいので、翌日の案内をお願いして其の日は本溪湖に一泊した。

翌日は早朝より工務科小柳技士の案内にて橋頭に向ひ、先づ橋頭硯石店を23號訪して、附近に橋頭石の自然石なきを調査せるところ橋頭硯石の發掘地は橋頭より20數軒の山奥に在り、荷馬車でたつぷり一日かゝるとの答へであつた。加之に橋頭石の發掘は凡て薄板として、採取して居るから吾々の要望するが如き自然石はないとのこと、そこで橋頭石の調査を斷念して鐵道に沿ひ局長發見の青石所在地點に向つて出發した。

途中釣魚臺の名勝を過ぎ、晝食の後、更に細河上流に沿ふて進んだ。淺野氏は既に足に豆を出かして閉口の體である、一行4名は黙々として歩を續け、午後4時頃南坂驛を過ぎ目的の鐵橋附近に到着した。局長の言に遠はず對岸の河床中に青石が磊々として轉在してゐる。私共は暫く物色の時間をこゝで過し、石質、形狀、重量等最も適當と思はれるものを選択した。

撰定した碑石及臺石の形狀寸法は左の如きものである。

石質 粘板岩の一種、橋頭硯石に類似せるも稍硬質ニメラドグリーン基質に淡綠色の條斑を帯びてゐる

寸法重量 句碑石長邊200匁、短邊160匁、厚80匁、重量3匁

臺石 長邊250匁、短邊180匁、厚80匁、重量約5匁

3. 碑石搬入

碑石及臺石の運搬はどうしても鐵道途中積の便法に依る外方法なく、これが特殊運搬に關しては奉天鐵道局、瀋陽築港事務所等各方面より猶大なる御援助を仰ぎました。

8月5日待望の裡に碑石は994列車により南安東驛に到着致しました、南安東から燕洋丘麓迄約30軒の重量運搬は連日の豪雨に災ひあた抄々しく進みませんでした、9月3日漸く湯池子道路の1部補修も完了しましたので、淺野組の手により運搬されました。

麓から丘頂までは所謂「かくらさん」の捲上方法で引上げました。

4. 施 工

句碑設計の方針に關しましては、直接局長の御指示を仰ぎましたが、施工要領を摘録すれば下記の通りです。

句碑臺石とも自然石を用ひました關係上、燕洋ヶ丘の芝山風景に調和する如く考へました。

意匠に就いては局員である洋畫科出身の秋久多登士氏が講想を練り、先づ構成上燕洋ヶ丘自體を大いなる紀念丘と見做し、句碑はその上に於て北東15度略國都新京方面に向けました。

文字面は色紙原寸法横18匁、縦21.1匁の4倍、即ち横72匁縦84.4匁として、自然石面を僅かに彫込み、その間

に原色紙文字を4倍に擴大したる文字を彫刻致しました。當初は船底彫に陰影の濃くなる様な方法を選んだのですが、石質の都合上矢矧彫の浅彫に変更し、文字面は反射光線の工合上油砥石で磨き上げることにしました。

尙直接現場の工事監督には公園股の崎田係員が之に當り、施工は浅野組の新名係員が之に當りました。

工費は浅野組に見積らした結果、運搬から竣工迄金額5577圓でした。

以上の要領で工事は着々進捗し、9月25日の竣工豫定日には完成する見込が付きまして、10月2日の佳日をとし除幕式を舉行することになりました。

2. 除幕式まで

夜來の雨も明け方から晴れ上り東雲に洩れる陽光は秋日和の光でした。矢野科長の指揮で早期から私共は驛前納係、式場係、現地受付係と分擔して、各々部署に就き今日行はれる晴れの除幕式を待ちました。

燕洋ヶ丘に張り廻らされた紅白の幔幕が、落葉の山野を背景にして麗麗の様な新鮮さで映えてみました。

高速度道路から右に折れた湯池子道路の兩側は、萬花嵐、大東園等の苗圃地帯です。此の苗圃地帯の入口を掘りて右鉄鑿道左清水銅山があり共に西方に手を延ばしその結び目が所謂燕洋ヶ丘の所在地です。この山峽の盆地を燕洋ヶ丘の丘麓迄湯池子道路が一筋に通じて居ります。

午前9時この野趣に富んだ道筋を循いて、第1號の車電話も清々しい乗用車が到着致しました。

安東省長夫人が令嬢香枝さんを伴はれて参られたので、程なく米田建設廳長が令嬢康子さんを伴はれて來場されました。

兩令嬢は榮えある童女として除幕の儀を執り行はれることになつて居りました。日滿兩令嬢の到着を皮切りに引き繼ぎ黒い乗用車が一點二點と彼方から式場さして疾走して参りました。

滿鐵専用バスを駈りとして、來賓各位は千峰閣の待合所に參集されました。豫定より遅れること30分、昨夜千峰閣に1泊された御遺族側を始めとし、來賓各位は三五伍千峰閣から式場指して下りて参りました。受付氏

が承つた御來賓各位の御芳名を列記すれば左記の通りです。

御遺族側	直木 正	坂本 幸三
	直木 力	藤原 裕治
	直木 嘉江	福田 伊八藏
	眞島 卓	貞松 恒郎
	大原 萬千百	

出席者

井野 英一	藤生 處長	大津 鯨
本間 徳雄	澤村 科長	瀬ノ口 藤太郎
志方 益三	廣岡 勝治	井澤 科長
坂上 丈三郎	小野 参事	井上 悟
孔 世培	濱 豪 賢	濱 匡 科長
邱 任元	阿部 俊男	中山 鋭雄
町田 義和	内野 正夫	朝日 啓一
山田 武治	阿川 幸壽	荒 鐵之助
佐藤 九郎	近藤 謙三郎	矢野 道
内田 靜夫	米田 正文	平野 徳松
五十嵐 眞作	河合 光榮	關 昌 作
黒田 重治	曹省長夫人	橋山 光雄
高橋 誠一	關 義 録	小島 劍一
前田 稔	御厨副縣長	浅野 美作
瀬戸 一郎		

毎日新聞安東支局代表
 國通安東支局代表
 滿洲新聞安東支局代表
 鴨江日報社代表
 滿日安東支社代表
 軍人後援會代表

1. 式場點景

午前11時半一同が式場に蒞席せられる頃から曇行が變り始めました。矢野科長の既會の辭に始まり、一頁は先づ修験を受けました。曇行は段々陰鬱になつて参りました。洋装の曹香枝さん、長襪姿の康子さんが除幕の儀を執り行はれる頃は風向きも變り廣窓、風が吹き始めました。清談、招魂ノ儀、獻饌と式は準通り進みました。莊重な祝詞奏上も済み會長井野參謀が老體を起され隣

圖が如く碑前に進められ式辭を奏上せられました。

參議は來安匂々咽喉を痛められたとか、聲量も低く痛々しく拜されました。

式 辭

白雲往來する秋天を仰ぎ、本日茲に盛大なる故直木燕洋博士の句碑除幕式を舉行せられましたことは、知人の一人として私の最も感歎するところであります。

鴨江の流れ逝いて還らざる早春2月11日、博士はこの地安東を人生終極の逆旅として、忽焉黃泉路に旅立たれたのであります。安東は博士が國造として最後に生み擧げた麒麟兒大東港の播種地であります。博士はこれが育成のため、身を殉じ巨大なる人柱となられたと申しても過言ではありません。燕歸る清澄の秋空にこの由緒の地燕洋丘をとし博士の句碑を頷めまいらせ御貴族始め或魂相通ずる生前學知の土が碑を圍み翕然相會することを得ましたことは、客位と俱に感慨一入深いものがあると存ずる次第であります。

句碑に燦然と輝く名句は大同2年還舊に近い御老體を踏けて御廣瀟せられた折の御心境を詠まれたものであります。朔風吹き荒ぶ當時の荒涼たる曠原大滿洲を如實に髣髴せしむる雄大な句であり、異國の民と偕に、人生の終止符をうたんとする悲痛且つ熱烈な意氣を示した佳句であります。博士が日滿兩國を通じ土木建設に、科學技術界に或は參議として國政上に残された偉大なる足跡は博士の至上の人格と共に名譽げ功成り勳位か之を物語るところでありまして、今更私共の贅言を要しないものと存ずます。今はたゞこの名句を拜誦し、俳人燕洋としての博士を追慕したいと存じます。逝く光陰は梭の如しか申します、然し博士の句魂は燕洋丘に不滅の光を燈し續けることでせう。

斯界の知友は此の句碑に類づきて博士が功績を讃え、笈を負ふ青年學徒は碑邊を低徊して崇敬の念を勃起することとせう。安東の都人士は遠望する大東港の壯麗を顧みて、顯彰の思ひに驅られることでせう。若し又壯士來りなば易水の故事を偲び、俳人この地を尋ねれば筵を席いて詩想を練ることとせう。

林間に酒を爛めつゝ博士を偲ぶ行人あらば、博士の句

魂は之を嘉みし迎へることでありませう。

歳々年々人は變れど、將又燕洋丘の四季は轉ずれども、丘への細徑はこれ等人士の去來で永遠に跡を絶たないと信じます。

聊か所感を披瀝して學式の辭と致します

故直木倫太郎博士紀念事業會

會長 井 野 英 一

淡青色の句碑に雨滴一が點二點掠めました。奏上の辭にも雨の雫が滲み落ちました。

井野參議は次いで參議府の祝辭を讀まれました。

祝 辭

本日茲に故直木倫太郎博士ノ句碑完成シ、除幕式禮ノ運ビトナリタルハ我等友人並ニ後輩一同ノ誠ニ欣快ニ堪ヘザルトコナリ。爾ニ博士逝去セラルルヤ、知友後輩相倚リ、博士ノ功績ヲ稱フルト共ニ其ノ溫容ノ跡ヲ永遠ニ止メムコトヲ圖ル。本日舉行セラルル建碑ノコトハ、即チ其ノ企テノ一ナリ、是レハ博士ヲ敬慕スル友人後輩ノ美シキ衷情ノ然ラシムルトコナリト雖モ、又偏ニ博士ノ玲瓏玉ノ如キ人格ニ因ルトコナラズムハアラス。

博士逝イテ既ニ半歳、去ルモノハ日々ニ疎シト云ハルコトアレドモ博士ヲ慕フノ情ハ漸ク深ク且ツ切ナルモノアリ。博士ノ友情ノ如何ニ厚ク、慈愛ノ如何ニ深カリシカヲ思ヒ、仰見テ今更博士ノ人格ノ感々偉大ナルヲ知ル。

安東ハ大東港及ビ水豊「ダム」ノ建設地近接シ、博士ノ關心最モ深カリシ處、然カモ建設事業進捗狀況視察ノ途次ニシテ、卒然病ヲ得テ終焉セラレタル處ナリ。此ノ因縁深キ地ニ景勝ノ丘ヲトシテ博士詠ゼラルルトコロノ快心ノ一ノ句ヲ刻シテ句碑ヲ建立シ、大東港ノ盛ニル限リ水豊「ダム」ノ存續スル限リ、永久ニ博士ノ面影ヲ留メテ博士ヲ偲ブノ緣ヲラシムトス。這回建碑ノ處ノ得タルコト之ニ優ルモノアルヲ見サルナリ。秋既ニ深ク風ハ颯々トシテ地ハ枯ル、鴨綠江ノ水ハ流レテ何時モ止マズ、中天高ク動ケル雲ハ其ノ行方ヲ知ラス、博士何レノ處ニ於テカ此ノサ、ヤカナル企テヲ受け給フラム。大東亞戰爭ハ今ヤ正ニ酣ニシテ眞ニ大東亞民族ノ興廢ノ岐ルノ秋

アリ。翼クハ博士ノ心靈常ニ吾等ト共ニ在リテ、吾等ヲ
 爾爾シ、學國ノ大理想達成ニ更ニ一層奇異アラムコト
 ヲ、一言以テ建碑ノ祝辭トス。

康徳10年10月2日

祝 式 設

讀み了つた參議は重々しく着席した暫し故人を偲ぶ風
 情でした。參議の胸前に佩かれた眞紅な會長が、一陣の
 風と共に芝生に落ちたのが強く私共係員の眼に滲み入り
 ました。

志方大陸科學院副院長の祝辭、谷交通部大臣の祝辭と
 祝ひの辭は續きました。

祝 辭

今日の此の佳き日直木倫太郎先生の句碑茲に其の工成
 る喜ばしき哉、先生の現身を失ひまつりて早や8個月、
 されど日々先生の温顔を偲び遺徳を慕ひて傷心未だ癒え
 ざる我等の眼前に、今此の佳き碑を仰ぐ喜び何にか譬へ
 む。

人ぞ知る先生は學問の人、技術の人たり、而して又世
 に秀でたる藝文の人たり、常の人に勝りてこよなく此の
 滿洲の地を愛で給ひし先生の熱情は、詩の心もて昇華せ
 られ17の文字に凝りて茲に快心の佳き句となる。我等
 後進の徒仰ぎて之を誦するとき、孤高なる先生の御胸に
 湧りし悲壯なる熱情に共鳴りて、不退轉の精進を誓ふの
 氣轉た頻りなり。

憶ふに此の丘や先生御胸の胸の、其の夢に浮びし麗
 しき地、先生の高邁なる科學研鑽の心は永く我が大陸科
 學院の上に留り給ふべく、又先生の雄渾なる技術精神と
 先生の高雅なる詩の魂は大東港の鎮として茲燕洋ヶ丘の
 邊りに永へに眠り給ふへし。

白き雲凍らば凍れ、我等は只凍れる雲をも溶きてし止
 まんの熱情をもて先生の御心のまにまに其の御後に續か
 ん。

思ふて茲に至れば涯しなき感懐潮の如く胸中に湧ち來
 るを覺ゆ、茲に極みなき愛惜追慕の念の一端を述べて、
 以て句碑成るの祝の辭となす。

康徳10年10月2日

大陸科學院院長事取扱

志 方 益 三

燕洋直木博士逝いて8閏月、茲に知友門人相會し功業
 を後昆に傳へ徳譽を萬世に頌せんが爲に、博士終焉の地
 湯池子に位をとし句碑を建立し功成りし本日幕を除くと
 云ふ。

余謂へらく、知友門人の感恩遂にこの美舉となるも亦
 以て博士往昔の徳明如何を知るに足る。美はしき哉この
 事あるや、而して博士亦莞爾として之を歎んと。惟ふに
 博士は日本工學技術界の耆宿として令名夙に高く、滿洲
 建國に當り特に乞はるゝや、決然老軀を挺して創業の難
 に處し、爾來10年國道局長、水力電氣建設局長、交通部
 技監、大陸科學院長等要職を歴任し、刻苦精勵才幹續
 克く我國土木技術及び科學研究の基礎確立に不滅の功を
 録し、更に參議に特任せらるゝや詔を承けて意らざる轉
 の大任を全うす。實に棟梁の器社稷の重臣と謂ふべし。

博士賦性英俊にして温、雅家に接するに至誠、後輩を
 導くに温情しかも委曲を盡さずんば止まず、故を以て素
 仰ぐに慈父を以てし博士の在る所常に春風駘蕩なり。し
 かも博士は常に科學界の巨星たるのみならず文學を善く
 し特に俳句に優れたりと聞く。今碑に勒したるは遠く祖
 國を離れ老軀を挺し、滿洲建國の聖業に殉ぜんとする赤
 誠を披瀝せるものにして、言簡にして意悽愴讀む者をして
 轉々感奮流涕せしむ。

抑々大東港は博士の創業にかゝはり爾來寸刻も忘るべ
 からざるの地なり。故に嚴寒敢てこの地に遊び遂に歸ら
 ず。誠に痛むべし、然りと雖も自ら拓きたる地に自ら歎
 じたる句の如く逝く。盡したる博士の本懐ならん歎。

今や大東亞聖戰愈々苛烈を極め、科學技術の粹戰局を
 決せんとなす。邦家の博士の如き材を冀む、今より甚しき
 はなし。然れども博士の指導誘掖による俊英雲の如きは
 尤も欣ぶ所なり。願はくは後輩諸君後を繼ぎて研鑽力圖
 怠るなく以て博士の遺業を大成せられん事を、聊か述べ
 て祝辭となす。

康徳10年10月2日

交通部大臣 谷 大 亨

晴雲はいよゝゝ低迷し雨脚も加つて参りました。然し
 式場は聊かも動盪せず静肅裡に執り行はれました。

安東省長、安東縣長、滿洲土木學會會長祝辭と式は運ぶ筈でしたが讀み上げを略し之を祭壇に捧呈したまふ玉串奉焼に廻りました。雲は風を勃び雨脚も早まりました。

撒票、送魂ノ儀と雨中の儀は執り進められました、列席の方々は義経少しも騒がすといつた姿で肅立されてみました。科長の閉會の辭と共に雲は亂れ始めたかの如く緊迫した暗雲は1時に暈を切り沛然として暴雨が地軸を洗ひ始めました。雷鳴も山間に轟き遂には霰となり雹と變じて雨中を交錯し始めました。

2. 直 會

直會の準備で千峰閣に屯した私共の1部は、式場の有様を望見し雨具の用意で大童でしたが雨傘1本といつた心細い状況でした。非常措置として千峰閣の防空カーテンを取りはずす手配をする一方、玄関前に待機中の自動車を全部丘麓に配備しましたが自然の暴威に壓倒され萬事休しました。

咫尺を辨せぬ雨の帳から、玄関口に現れた知名の方々で玄関口は火事場見舞の修羅場といつた混雑でした。

御遺族側の御夫人方や御老體の井野參議、古稀に近い瀧之口商工公會長、大津鏡翁の庚驅が私共の最も案じられた方々でした。

肥大漢であらせられる阿川市長、佐藤九郎技正等のずぶ濡姿は洒々落々と出現した道化役者の様でした。一同は千峰閣女子軍の總出動で青苔へのため桐壺、初鰯、明石、若菜などと源氏名を冠せられた部屋々々に案内されました。

若い神官方も衣冠を崩して右往左往されました。揃ひの「どてら」姿で一同が大廣間に参集されましたのは一時過ぎでありました。袴を脱いだこの直會の情景は、俳人燕洋を偲ぶに相應しかつたかも知れませんが、この風雨の爲め病に冒されはしないかと近藤局長始め私共は心に祈願申上げた次第であります。

「どてら」着て居並ぶ大廣間の有様を模越しに瞥見いたしましたら、何誰が閣下か平履員か識別し得られゆ只の羅漢でした。

井野會長の御挨拶、近藤局長の工事経過報告と直會の

式次第はなごやかな雰囲気の中に運ばれました。酒宴酣な頃から雨雲もからりと晴れ上りの空高き燕洋ヶ丘秋の陽を浴びて燦々と輝き始めました。

直會も終了に近づきました頃に濡衣も乾きました地元の方々は連れを求めて往還用のバスに便乗し、忙しくも和な今日の思ひ出と記念品を土産に歸路に就かれました。路遠遙々参られました方とは交々所定の部屋に取られ、身を包む「どてら」も膚も温もりてさて語りな雲凍るといつた風情で今日の除幕式を語り交されさこでせう。

借着の「どてら」姿で衣裳具を小脇に抱えられた神官方々を自動車で御送り申し上げてから私共は祭壇の脚末を済しました。炭火の煙りで頂戴した祝辭の奉書を寧に乾しつゝ整理を致しました。

祝 辭

秋深キ大東港ノ一角ニ故參議直木倫太郎博士ノ紀念除幕式舉行セラルルニ當リ祝辭ヲ述ブルノ機ヲ得タル感懐ニ堪、ザル所ナリ。惟フニ第1期産業5ヶ年計劃立サル、ヤ故參議ノ卓見ハ此ノ鴨綠江下流ノ原野ヲ闢計畫上ノ一大支柱ナルベキコトニ著目サレテヨリ、或自ラ寒風荒ブ黃海ニ浮ビ、或ハ秋風陀シキ葦原ニ立テ下同僚ヲ督勵シ基礎的條調查ヲ了シ、遂ニ康徳6年以雄大ナル構想ニ基ク臨港大工業都市大東港建設ノ事業ヲ進捗スルニ至レリ。思ヒキヤ康徳10年ノ1月本事業ノ第1期建設成リ、第2期建設ニ移ラントスル日、此ノ因難ノ地ニ部下後輩ヲ激勵ノ折柄風厲ノ侵ス所トナリ、澁然トシテ殘セラレントハ、今故人ノ名モ床シキ燕洋ヶ丘ニ其ノ遺句ヲ拜唱シ、此ノ國入トナリ終ヘシ偉人ノ心境ヲ偲ブ時誰カ感懐ヲ催サザラム。

我等省民相携、テ此ノ偉業ヲ繼承シ、故人ノ靈ニ應ムコトヲ誓ヒテ祝辭トナス

康徳10年10月2日

安東省長 曹 承 宗

故直木博士逝いて茲に半星霜追憶の念愈々深く敬慕の情愈禁じ得ないのであります。

生前に於ける土木界石技術界に遺された功績は今更申すも愚な事であります。特に技師直木さんとして詩人眞

木さんとして到底常人の及ぶことの出来ない或絶対境地に到達して居られたので御座います。甚だ失禮乍ら博士の遺された隨筆、和歌を引用させて頂きますが「技術は詩を成す人にして技術は大成せん、我等土木技術家は日常生活が詩である、詩境に生きて詩を解せざるは愚」又「技術は詩を有つことにより技術は生きる、詩は雅懐である包容である」と言つて居られるのであります更に博士は最後の大事業とも言ふべき我土木學會の母體たる科技聯創立委員長としてその發會式詠まれました。

「大東垂ひつくめて國造り

この初業に活きぬかでは

「海越えてかくも集へる技術人の

力併せて亜細亜拓かん」

とあります

以つて博士の抱懐を知るべきであります。博士が滿洲を愛せられ滿洲の土とならんとの深き決意を17文字に表された本日句碑除幕式は洵に意義深い計畫であると存する次第であります。この句碑は今後幾千年の後までも仰いで後輩を指導標榜せられる事と思ひ、吾々技術界により先賢を持つた喜びを感じつゝ本日の祝詞と致します。

康徳10年10月2日

滿洲土木學會長

本間 徳雄

むすび

春2月故博士に仕へた私共は秋10月その建碑式に係員として仕へたのであります。

大東港に奉職する身である私共には狭い因縁とは申せ思ひ出の盡きぬ今日の奉仕でした。來賓各位の方々も定めし今日1日の縮圖を故博士の追憶に加え心の奥深く藏せらるゝことでせう。

釣瓶落しの秋の陽は丘頂に鎖まる一基の碑に陰影を深く刻みつゝも夕闇迫ると共に淡く薄らぐことでせう。

茜さす夕陽を背に受けて私共は思ひ出の燕洋ヶ丘に別れを告げつゝ千峰閣を出たのであります。秋風に落葉舞ひ來る碑邊哉、人生到處青山在りとか申します。無名の青山なりしこの丘も「堅凍るこの國入となり終へむ」との遺句を鏤した故博士の名句を得て燕洋ヶ丘といふ命名を永久に授けられたと申すべきでせう。

股懸近きにある大東港を訪づる者は先づその生み親の句魂籠まるこの丘を弔ふべきでせう。

— 終り —

